

区分名： 看護実践を支える科目
科目名： 感染看護学
(英語名称： Infectious Nursing Science)

【担当教員】 渡邊 美恵子、黒田 るみ

【開講年次】 3年次 【学 期】 前期 【必修／選択】 必修

【授業形態】 講義 【単 位 数】 1単位 【時 間 数】 15時間

【概要】

看護専門職業人として働く場は、病院はもとより在宅看護、地域と様々であり質保証として感染看護学は重要である。種々の感染症が流行した場合に対応するための疫学的な視点も求められる。感染防止に関する基礎知識をもとに感染防止に必要な方策を学び、様々な状況に対応するための基盤となる考え方を培う。

看護師として実務経験のある教員が担当する科目。

【学習目標】

- 1) 感染看護学の重要性について説明できる。
- 2) 感染管理に関する基礎知識について説明できる。
- 3) 病院、施設における感染管理の実際について説明できる。
- 4) 様々な状況における感染防止の対策について説明できる。
- 5) 感染症対策の法的側面について学びグローバルな視点での感染対策について説明できる。

【テキスト】

指定しない。

【参考書】

講義内で提示する。

【成績評価方法】

定期試験 50% (50 点)、レポート課題・授業への参加態度 50% (50 点) を合わせて合計 60 点以上を合格とする。

【その他（メッセージ等）】

看護の専門性と感染看護についての理解を深め、専門職として基盤となる感染防止に対する知識と行動が行えるように学んでいきましょう。

【授業内容(学習項目)】

回数	項目	内容（キーワード等）
第1回	感染看護とは	感染看護学の位置づけと学びの目的 職業感染防止への対応
第2回	公衆衛生における感染症対策	世界の感染症とパンデミック対策
第3回	感染症対策	1) 日本における感染症に関わる医療体制 2) 感染管理活動
第4回	感染防止の基礎知識と看護技術	1) スタンダードプリコーション 2) 感染経路別予防対策を隔離法 3) 手洗い 4) 防護用具 5) 洗浄・消毒・滅菌 6) 医療関連感染の予防
第5回	職業感染防止への対応	自己状況の把握と他者への影響 職業感染防止における看護師の役割
第6回	薬剤耐性菌の基礎と感染管理	感染症の原因となる様々な微生物と病院施設の多職種での取り組み
第7回	医療施設における感染管理の	病院における感染対策チーム（ICT）および 感染管理認定看護師（ICN）の活動
第8回	実際（1）	
第9回	医療施設における感染管理の	医療施設における感染対策の事例
第10回	実際（2）	
第11回	様々な状況における感染看護	病棟・外来等における感染看護
第12回		
第13回	感染と看護ケア	差別と偏見
第14回		患者・職員のメンタルヘルス
第15回	まとめ	感染管理の現状と課題

【学習アウトカムと科目達成レベル表】

学習アウトカム			科目達成レベル		
1. プロフェッショナル					
看護専門職者をめざす者として、それにふさわしい基本的な態度・姿勢の必要性を理解し、行動できる。					
1)	看護倫理	①	生命倫理と看護の倫理の原則を理解し、それに基づき、考え、行動できる。	—	習得の機会がない。
		②	生命の尊厳や人権について理解し、人々の意思決定を支え、擁護に向けた行動をとることができる。		
2)	習慣・服装・品位/礼儀	①	状況に適合した、服装、衛生観念、言葉遣い、態度をとることができる。	△	習得の機会があるが、単位認定に関係ない。
		②	時間を厳守し、何事においても真摯に対応し、積極性や誠実性を示すことができる。		
		③	自らの誤り、不適切な行為を認識し、正すことができる。		
3)	対人関係	①	他者に自分の価値観を押しつけず、常に敬意を払って接することができる。	△	習得の機会があるが、単位認定に関係ない。
4)	法令等の規範遵守	①	個人情報の取扱いに注意し、守秘義務を守り、人々のプライバシーを尊重できる。	—	〃
		②	各種法令、大学等関連諸機関の規定を遵守することができる。		
2. 生涯学習					
看護専門職者として優れた洞察力と応用力を兼ね備え、看護学及び関連の広い分野の科学的情報を収集・評価し、論理的思考の継続的改善を行うことができる。					
1)	自己啓発と自己鍛錬	①	看護学・医療の発展、人類の福祉に貢献することの重要性を理解できる。	△	習得の機会があるが、単位認定に関係ない。
		②	看護学に関する情報を、目的に合わせて効率的に入手することができる。		
		③	独立自尊の気風を養い、自己管理・自己評価を行い、自身で責任を持って考え、行動できる。		

		④	自らのキャリアをデザインし、自己主導型学習（自身の疑問や知識・技能不足を認識し、自ら必要な学習）により、常に自己の向上を図ることができる。		
3. 人間関係の理解とコミュニケーション					
自己を内省する力を養うとともに、他者とのコミュニケーションを通して、他者を理解し、互いの立場を尊重したよりよい人間関係を築くことができる。					
1)	看護を必要とする人々とのコミュニケーション	①	人々の生命、健康、生活について幅広い関心を持ち、深く洞察することができる。	△	習得の機会があるが、単位認定に関係ない。
		②	人々の社会的背景を理解して尊重することができる。		
		③	看護専門職者としてふさわしいコミュニケーションスキルを身につけ、実践できる。		
		④	望ましい健康行動がとれるよう人々の意思決定を支援することができる。		
2)	チームでのコミュニケーション	①	人々の健康を支えるチームの一員に看護の立場から参加し、他職種と協働できる。	○	態度、習慣、価値観を模範的に示せることが単位認定の要件である。
		②	チーム医療におけるリーダーシップの意義と看護専門職者が果たす役割について理解することができる。		
		③	チームメンバーに対して、尊敬、共感、信頼、誠実さを示し、看護専門職者としての責任を果たす重要性を理解することができる。		
		④	人々に必要な看護が継続されるよう、医療チームメンバーに適切に情報を提供する重要性を理解することができる。		
4. 知識とその応用					
看護専門職者の基盤となる知識を修得し、科学的根拠に基づき、看護の実践に応用できる。					
			以下の科目の知識を修得し、学習内容を説明できる。（学部コースツリー参照）		
1)	豊かな感性と倫理観を	①	感性を高める科目	△	習得の機会があるが、単位

	もつ看護専門職者	②	倫理性を高める科目		認定に関係ない。
		③	論理的思考能力を高める科目		
		④	表現力を培う科目		
2)	創造性豊かな看護専門職者	①	社会の理解を深める科目	○	態度、習慣、価値観を模擬的に示せることが単位認定の要件である。
		②	人間の理解を深める科目		
		③	人間の身体機能と病態を理解する科目		
		④	看護の基本となる科目		
		⑤	看護実践の基盤となる科目		
3)	ニーズに対応する実践能力を備えた看護専門職者	①	看護実践の応用となる科目	-	習得の機会がない
		②	看護の実践		
		③	看護を統合する科目		
5. 看護の実践					
人々が生活するあらゆる場において、あらゆる健康レベルの人々のニーズに基づいた看護を実践することができる。					
1)	人々のニーズに基づいた看護の実践	①	人々の健康レベルを、成長発達や日常生活を取り巻く環境の観点で捉えることができる。	△	習得の機会があるが、単位認定に関係ない。
		②	人々が活用できる地域の社会資源、保健・医療・福祉制度や関係機関の機能と連携について説明できる。		
		③	人々の健康に関するニーズを明らかにするために、必要な情報を収集し、アセスメントすることができる。		

		④	健康問題に応じた、根拠に基づく看護を計画することができる。		
		⑤	安全で効果的なケアを探求し、あらゆる健康段階に応じた看護を実践できる。		
		⑥	看護の対象となる人々、保健医療福祉等の専門職と協働して、人々がその健康問題を解決することを支援することができる。		
		⑦	看護実践を評価し、計画の修正を図ることができる。		
		⑧	地域の人々の健康問題の解決のために、既存の社会資源の改善や新たな社会資源の開発、フォーマル・インフォーマルなサービスのネットワーク化、システム化の重要性を説明できる。		
6. 地域社会への貢献					
<p>(1) 地域の特性を理解し、人々が住み慣れた地域や家庭で安心して生活できるよう、看護専門職者としての役割を果たすことができる。</p> <p>(2) 福島での大規模複合災害から、災害時に必要となる種々の連携について学び、説明できる。</p>					
1)	地域の人々の生命と暮らしを守る	①	地域の特性やそこで暮らす人々の生活状況を理解し、人々が抱える健康問題と関連する要因や生活背景について説明できる。	○	態度、習慣、価値観を模擬的に示せることが単位認定の要件である。
		②	人々とともに、安心して生活できる地域づくりを考え、そのために協働する看護専門職者の役割について説明できる。		
2)	福島の災害から学ぶ	①	福島でおこった大規模複合災害を学び、必要な医療・福祉・保健・行政をはじめとする各種連携の実際を理解し、説明できる。	—	習得の機会がない
		②	放射線災害の実際を知り、放射線を科学的に学び、適切に説明できる。		
		③	放射線（および災害）に対する地域住民の不安が理解でき、社会・地域住民とのリスクコミュニケーションについて説明できる。		